

東京災害ボランティアネットワーク 第一次・第二次新潟県中越地震被災地救援活動の特徴

【第一次・第二次派遣】

第一次・第二次と2度に渡って、ボランティアを派遣し、新潟中越地震の被災地支援を実施した東京災害ボランティアネットワーク。先遣隊・調査隊を含めると、第一次・第二次派遣で130名あまりのボランティアが支援活動に参加するにいたりました。

【東災ボならではの要素】

今回の一連の支援活動の中で、東京災害ボランティアネットワーク被災地支援プログラムの特徴がいくつか見られました。いずれもが、東京災害ボランティアネットワークならではの視点・方法であり、他の団体では見られなかった特徴ではないかと思われま

災害ボランティアセンターに負担をかけずに独自のルートで支援先を決定した

阪神・大震災以降、被災地には社会福祉協議会を中心とした「災害ボランティアセンター」が立ち上がり、ボランティア活動のコーディネートを担当してきました。今回の新潟中越地震においても、被災地域の社会福祉協議会を中心とした「災害ボランティアセンター」が立ち上がり、被災者の方々への支援活動を展開していました。

しかし、新潟県中越地震は、阪神・淡路大震災以降、最も規模も被害も大きい災害となったといえ、また、地域社会が根強く他人(地域外の人)に頼らない地域性や、災害ボランティアの認知不足などによって、「ニーズを把握する」「ボランティアを募集する」「ボランティアを編成する」「ボランティアを派遣する」「ボランティアからのフィードバックを元に次の活動を思案する」という、災害ボランティアセンターが果たすべき機能が思うように展開できなかつたことは否めません。

そんな中、東京災害ボランティアネットワークでは、全国組織を持っている参加団体の独自の人間関係を頼りに、被災地内のいくつかの地域に直接アクセスし、支援活動の環境を整えていきました。結果、災害ボランティアセンターへ支援場所を問い合わせるでもなく、支援プログラムを一任するでもなく、いち早く支援活動を展開することができました。

様々な地域の被災者の方が避難している大型避難所への支援ではなく、地域への支援に力を注いだ

大型避難所は行政機関等の支援が入っていたこともあり、忘れられてしまう可能性すらある小規模避難所が点在する地域への支援を中心に据えました。もちろん東京災害

ボランティアネットワークに大型避難所への責任ある支援を担えるだけの實力があれば、
様々な形で大型避難所への支援を決定していたかもしれません。しかし、

支援する側、支援される側という垣根を越えた「交流」をも視野に入れた活動を展開
した

三宅島支援時に培ってきたアイデアを